

〈論文〉

## ドイツ語のアスペクト — 言語における視点化の力学についての方法的考察 —

藤縄 康弘

### 1. はじめに

アスペクトは、狭義に捉えた場合、出来事の完了（非継続）と不完了（継続）、ないし外観的な捉え方と内観的な捉え方の区別が文法的な表現手段によって一貫して行われる現象であると理解される（Bußmann 1983: 46, Leiss 1992: 15-71）。その際、出来事を表示する中核的な語が一般的に動詞である限りにおいて、アスペクトは動詞の範疇であることが見込まれる。現にアスペクトの典型事例として引かれるスラヴ諸語の動詞ペア（ロシア語：pisat' – napisat'）や英語のいわゆる進行形・非進行形（I am writing – I write）、日本語のスル形・テイル形（書く – 書イテイル）などは、そのようなものである。

しかし、表現における所記と能記の二元性を考慮するなら、そのような狭義の「アスペクト」を基準とすることは必ずしも好ましいことではない。というのも、完了対不完了や外観的対内観的に類する区別は、意味（対象指示）の範疇として汎言語的に想定し得る所記的条件である一方、その区別がどれだけ一貫して文法形式に反映されるかは能記の問題であり、個別言語的に条件づけられるからである。上述の言語でアスペクトとしてなされる区別そのものは、他の言語でも、語彙的、造語的、統語的など、さまざまな方法で行われ得る、ないし、少なくともその可能性は否定できない。さらに実際、そのような表現が、ある言語において多かれ少なかれパターンとして認められるのなら、もはやそれを上述の意味での「アスペクト」ではないという理由で除外するよりは、むしろ、等価の意味的区別が認められる限りにおいて広義にアスペクト表現と捉え、関連する現象も視野に入れて観察を行うほうがはるかに望ましい。そうすることでアスペクト論、ひいては文法理論の精緻化も期待できる。

そこで本稿では、狭義にはアスペクト言語と見なされないドイツ語を対象に、こうした広義の視点からアスペクトのあり方を概観する。その際、出来事の内的時間構成を異質性と分割性という二つの独立的な次元で動態的に捉えることにより、ドイツ語においてもアスペクトが、さまざまな語彙的、造語的、文法的な現象と接点を持ち、これらの体系や機能に対して基盤的な役割を果たしていることを明らかにする。

## 2. アクティオンズアルトとアスペクト

上述のとおり、ドイツ語は一般にアスペクト言語とは見なされていない。というのも、(1) のような現在時制の文は、習慣的・反復的な出来事のほか、一回的な出来事を意味することもあり、その場合、出来事指示の基準時である「いま」を、当該の出来事の中に置いて内観的に（つまり「目下継続中」と）解釈することも、同じ基準時を出来事の外に置いて外観的に（つまり「出来事はまるごとこれから起こる」と）解釈することも可能である。同様に (2) も、時制が過去なので基準時が「いま」以前に置かれるという違いこそあるものの、内観的にも（つまり「そのとき継続中」とも）、外観的にも（つまり「それから出来事が起こった」とも）解釈できる。こうした解釈の差は、例示のとおり、適当な副詞規定を補うことで明確にすることは可能だが、そうした副詞規定は任意の表現であり、その選択に応じて動詞の形態が限定されるわけでもないので、動詞の活用範疇としての狭義のアスペクトは認められない：

(1) **Karl arbeitet (immer / gerade / bald) bei mir.**

カールは（いつも / いまちょうど）私のところで仕事をしている /  
（間もなく）私のところで仕事をする。

(2) **Karl arbeitete (damals / gerade / dann) bei mir.**

カールは（当時 / そのときちょうど）私のところで仕事をしていた /  
（それから）私のところで仕事をした。

とはいえ、既存の文法書や研究書においてアスペクトが引き合いに出される現象はドイツ語でも少なくない。このうち、まさに「アスペクト」と称される現象は、たいがいアクティオンズアルトのことである。アクティオンズアルトは、厳密にはアスペクトと区別されるものではあるが、相互に極めて密接に関連するのも事実である。そこで、2.1. 節でドイツ語における両者の関連性を具体的に確認し、2.2. 節でその関連性にアプローチするのに有効と思われる分析の道具立てを素描する。

### 2.1. アクティオンズアルトのアスペクト的効果

アクティオンズアルトとは、開始や終了、反復など、出来事の内的時間構成に焦点を当てる語彙的な表現である。その方法としては、基礎動詞そのものによるものや任意の副詞規定によるもの、助動詞や機能動詞を用いたものなどが挙げられるが、特に重要なものは動詞の接辞化や母音交替などの形態論的な表現である。Helbig &

Buscha (1987: 73-74) は, (1) ~ (6) のような動詞のペアを例示している:<sup>1</sup>

(1) 起動相 (ingressiv)

- |    |                                |            |
|----|--------------------------------|------------|
| a. | blühen – <i>auf</i> blühen     | 咲く — 開花する  |
| b. | brennen – <i>an</i> brennen    | 燃える — 着火する |
| c. | gehen – <i>los</i> gehen       | 行く — 出発する  |
| d. | schlafen – <i>ein</i> schlafen | 眠る — 眠り込む  |

(2) 終了相 (egressiv)

- |    |                              |               |
|----|------------------------------|---------------|
| a. | blühen – <i>ver</i> blühen   | 咲く — 花が盛りを過ぎる |
| b. | bohren – <i>durch</i> bohren | 穴をあける — 貫通する  |
| c. | frieren – <i>gef</i> frieren | 凍る — 凍りつく     |
| d. | reißen – <i>zer</i> reißen   | 裂く — 引き裂く     |

(3) 使役相 (kausativ)

- |    |                         |                   |
|----|-------------------------|-------------------|
| a. | glatt – <i>glät</i> ten | 平らな (形容詞) — 平らにする |
| b. | sinken – <i>sen</i> ken | 沈む — 沈める          |

(4) 反復相 (iterativ)

- |    |                                |                      |
|----|--------------------------------|----------------------|
| a. | bitten – <i>bet</i> ten        | お願いする — 物乞いをする, ねだる  |
| b. | platschen – <i>plät</i> schern | ピチャと鳴る — ピチャピチャ音を立てる |

(5) 縮小相 (diminutiv)

- |    |                          |                 |
|----|--------------------------|-----------------|
| a. | husten – <i>hüst</i> eln | せきをする — 軽いせきをする |
| b. | lachen – <i>läch</i> eln | 笑う — 微笑む        |

(6) 強意相 (intensiv)

- |    |                              |               |
|----|------------------------------|---------------|
| a. | künden – <i>künd</i> igen    | 告げる — 解約を通知する |
| b. | spenden – <i>spend</i> ieren | 寄贈する — 気前よく施す |

Aspectが「同じ出来事に対する異なった見方」を提供するのに対し, アクツイオーンスアルトのペアでは, 相互に関連性は認められるものの, 同一ではない出来事

<sup>1</sup> アクツイオーンスアルトとして, ほとんどの先行研究で「継続相」(durativ または kursiv) が挙げられているが, Aspectがペアで存在することと対比させる目的で, 敢えてアクツイオーンスアルトもペアのかたちで整理すると, この相はもっぱら起動相や終了相を派生するペアで接辞化されていないほうに現れる一方, 「非継続相」から「継続相」を派生させるプロセスは事実上, 見当たらない. このことから, 「継続相」は, 積極的に規定される相ではないと考えられる.

が提示される。このことが顕著なのは、ひとつには使役相である。この相は、基本となる動詞（や形容詞）の表す「沈む」や「平らだ」といった出来事・状態にはもともと含まれていない動作主を付け加えるという点で、内的時間構成以上のことを意味しており、基本動詞と同じ出来事を意味していない。また、反復相や縮小相、強意相も、内的時間構成以上のことを意味するという点では同様である。例えば (4a) の *betteln* 「物乞いをする」は、確かに何度も *bitten* 「お願い」することを意味するには違いないが、単にそれだけに留まらない特有の含み（動作主は乞食や子供、お願いの内容は施し、など）もある。

これらに比べると、起動相や終了相には「同じ出来事に対する異なった見方」に近いペアも認められる。例えば (1d) を用いて (7) のように表現すれば、確かに (7a) は現に「眠っている」という継続を表し、いまこの睡眠を内観する状況にある一方、いま「眠り込む（ところだ）」という意味の (7b) は、まだ睡眠の手前にあるという点で、同じ睡眠を外観していると言える：

- (7) a.     *Hans schläft.*            ハンスは眠っている。  
      b.     *Hans schläft ein.*       ハンスは眠り込む（ところだ）。

しかし、この違いは当該の文が現在時制でなくなれば、失われてしまう。例えば過去時制の (8) では、たとえ (8a) が継続中の睡眠を示すとしても、(8b) は決して睡眠に至る前の状況を指しているわけではない。いずれの例でも「ハンスの睡眠」は始まっている。また、この睡眠がその後、完結したのかどうかという別の観点でも、一方は完結を、他方は未完結を示すといったような根本的な違いは認められない：

- (8) a.     *Hans schlief.*            ハンスは眠っていた / 眠った。  
      b.     *Hans schlief ein.*       ハンスは眠り込んだ。

(8a) の *schlief* が過去における単なる「睡眠」の存在を示すのに対し、(8b) の *schlief ... ein* は過去に「睡眠の開始」があったことを示している。件の動詞ペアは、「睡眠」という共通項こそあれ、完全には同一でない出来事を意味しているのである。

同様に (7) でも、(7a) の *schläft* は「睡眠」を、(7b) の *schläft ... ein* は「睡眠の開始」を意味している。その際「睡眠の開始」とは、覚醒から睡眠への移行のことである。そこで現在時制の場合、基準時の「いま」は、(7a) では「睡眠」と重なる一方、

(7b) で「いま」と重なるのは「睡眠」そのものではなく、睡眠への「移行」であり、このことから間接的に「睡眠」が今後起こると了解されるのである。

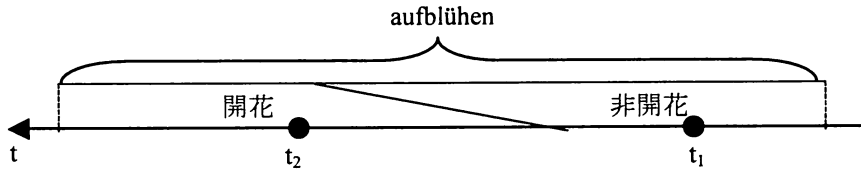
このように、ドイツ語の「アスペクト」は、共通の出来事を含みながらも厳密には語彙の意味が同一でない動詞のペアが、時制のような特定の文法的条件と組み合わせることによってもたらされる副産物であり、それ自体がこのペアに帰せられるような文法範疇ではないと言える。その意味で、ドイツ語はアスペクト言語ではないという通説（例えば Admoni 1970: 169）は妥当である。

## 2.2. 出来事の内的時間構成における異質性と分割性

とはいえ、(7) のように副次的ながら、ドイツ語でもアスペクトの効果が可能になる以上、その仕組みについては考察する必要がある。時制のような文法現象に条件づけられてアスペクトの効果が生まれる以上、アクツィオンスアルトは文法体系との接点を有するはずである。また、文法体系が一般的・包括的である限りにおいて、この接点も個別的・局所的ではあり得ず、一般的・包括的な原理に裏づけられていよう。その意味で、既存の文法書や研究書で広く行われているように、起動相や終了相、使役相を「完了相」として一括し、これと対をなす動詞の相 (= 継続相) を「不完了相」として対置することは有効であり得る。ただし、この「完了相」と「不完了相」は、種々のアクツィオンスアルトを単にあとづけ的に総称するものではなく、独立性の高い基準によって対極的に条件づけられた類型である必要がある。先行研究はこの方向で必ずしも十全とは言えないが、本稿では、その中であって出発点となり得る Leiss (1992: 45-54) に若干の修正を加え、出来事の内的時間構成における異質性と分割性を基準として次のような類型化を試みる。

起動相であれ、終了相であれ、使役相であれ、完了相の出来事は、異質な時間を統合した出来事であり、全体を分割すると、個々の部分にはもはや全体との同一性が認められなくなってしまうような出来事である。例えば、起動相の *aufblühen* (1a) は、「開花」という性質が当てはまる時間と「非開花」という性質が当てはまる時間が図 1 (次頁) のように統合された出来事である。仮にこの出来事全体を  $t_1$  と  $t_2$  を境にして三分割しようとするれば、「非開花」から「開花」への移行部分を一切含まない  $t_1$  以前の部分と  $t_2$  以後の部分は、もはや全体の *aufblühen* と質的に同じではなくなってしまう。この出来事は内部が異質であり、全体との同一性を失うことなく分割することができない出来事である：

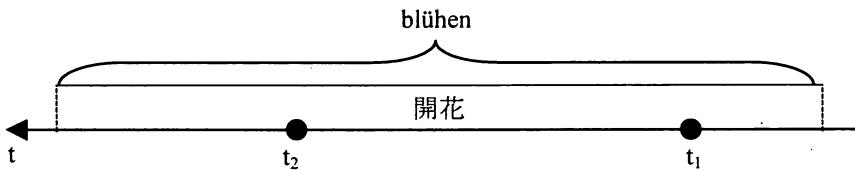
図 1 : aufblühen の内的時間構成



終了相や使役相についても、例えば終了相の *verblühen* (2a) では「開花」と「非開花」の順序が入れ替わり、使役相の *senken* (3b) では統合される性質が「開花」と「非開花」に代わって「対象がある一定の位置にある」と「同じ対象がその位置より低い位置にある」となるものの、枠組みそのものは図 1 と変わらないので、これらの出来事にも相変わらず異質性と非分割性が当てはまる。

これに対し、不完了相の出来事は、均質な時間が集積した出来事であり、全体を分割しても再度、全体と同質の部分を得られるような出来事である。先の *aufblühen* や *verblühen* と対をなす *blühen* で例示すれば、図 2 のように、この出来事はその内部のいずれの時間にも開花という性質があてはまり、全体を任意に、例えば  $t_1$  と  $t_2$  を境に 3 つに分割しても、分割された部分すべてが全体の *blühen* と同じ性質である。つまり、不完了相は、完了相とは対照的に、非異質性と分割性によって特徴づけられるわけである：

図 2 : blühen の内的時間構成



以上の例では、表 1 のとおり、異質性と非分割性、非異質性と分割性が一対一に対応する。そのため、二つの次元で基準を立てることが冗長に思われるかもしれない：

表 1 : アクティオンスアルトとしての完了相と不完了相

	異質性	分割性	動詞の例
完了相	+	-	aufblühen, verblühen, anbrennen, einschlafen, ...
不完了相	-	+	blühen, brennen, schlafen, ...

しかし、異質性と分割性は、相互に関連し合いながらも、あくまで独立した次元であり、どちらも必要である。このことは、従来の分類学的アクツィオンスアルト論では扱いが困難な出来事が、これで適切に扱えるようになることから正当化される。

例えば、lesen や essen, trinken のような、変化を意味しない他動詞は、接辞化された完了相（終了相）の動詞 durchlesen「読み通す」や aufessen「食べ切る」、austrinken「飲み干す」などの存在に鑑みて不完了相（継続相）と見なされる反面、(9d) のように過去分詞による名詞修飾が可能であるという点では、(9b) のような不完了相の自動詞より、むしろ (9a), (9c) のような完了相の自動詞・他動詞と同様の振舞いを見せる：

- |        |                              |        |
|--------|------------------------------|--------|
| (9) a. | der <i>angekommene</i> Zug   | 到着した列車 |
| b.     | *der <i>gearbeitete</i> Mann | 働いた男   |
| c.     | der <i>verhaftete</i> Mann   | 逮捕された男 |
| d.     | das <i>gelesene</i> Buch     | 読まれた本  |

単なる分類学的アプローチに留まる限り、このような動詞については、完了相・不完了相の別が規定できないか、状況に応じてどちらでもあり得るとせざるを得ず、いずれにしても対症療法の域を出ない。

しかし、均質性と分割性の基準に基づくなら、これらの出来事は、非異質 (= 均質) ではあるものの、必ずしも分割可能とは限らない。分割可能かどうかは、これら行為の対象が数量的にいかに関限定されるかによる。すなわち、目的語を伴わない lesen「読書する」や Bücher lesen「本（無冠詞・複数）を読む」は、この出来事の中のどの時間を取り上げても全体と同じ lesen ないし Bücher lesen が当てはまるので、分割的であるが、ein Buch lesen「本を1冊（不定冠詞・単数）読む」のように対象が数量的に限定されれば、その経過の中途段階ではまだ本を1冊読んだことにならないので、全体の性質 ein Buch lesen は部分に妥当せず、この出来事は非分割的ということになる。

こうして lesen などの動詞においては、目的語の数量的限定性という統語的条件に依存して、<sup>2</sup> 非異質的かつ分割的という組み合わせだけでなく、非異質的かつ非分割的という組み合わせも可能となる。その際、接辞化による完了相動詞の形成は、非異質

<sup>2</sup> 異質性と分割性は、動詞の表す出来事だけでなく、目的語が表す対象の類型化にも当てはめられる。個体としてのモノが異質的かつ非分割的である一方、物質としてのモノは非異質的かつ分割的である。このように、名詞と動詞とに共通する次元があるからこそ、アスペクトの現象は、目的語の数量的限定性に条件づけられ得るのである。

的 (= 均質) な動詞を基礎動詞とする一方、過去分詞による修飾は、非分割的な出来事を表す動詞と目的語 (内項) の間に可能であると一般化すれば、lesen など、変化を含まない他動詞は、まさにこの両方の条件に合致する。先に矛盾と思われたこれら動詞の振舞いは、もはや矛盾ではなく、妥当なものとして説明がつくのである。

表 2 : 異質性と分割性の組み合わせの可能性

	異質性	分割性	動詞の例
完了相	+	-	aufblühen, verblühen, anbrennen, einschlafen, ...
?	-	-	ein Buch lesen, eine Pizza essen, ...
不完了相	-	+	blühen, brennen, schlafen, ...

アクティオンスアルトを異質性と分割性の組み合わせとして記述すると、表 2 の結果となるが、ここに挙げられていない組み合わせ、すなわち、「異質的かつ分割的」は、定義上、不可能であることに注意されたい。例えば、A と B という異質な存在が統合されたなら、その全体は、A でも B でもない存在 (仮に C) となるか、さもなければ、A または B のいずれか (仮に A) になるかである。しかし前者では、全体である C は部分である A, B のいずれとも等しくないし、後者でも、全体 A は部分 B のほうと等しくない。いずれにせよ、全体との同一性を失うことなく分割することは叶わないわけである。他方、分割的な存在は、いかなる部分をとっても全体に等しいのだから、その内部は必ず均質であり、異質的であるということとはあり得ないのである。

すると表 2 からは、二つのことが導き出される。ひとつは異質性が非分割性を含意するということであり、もうひとつは分割性が非異質性を含意するということである。あるいは、別の言い方をすれば、aufblühen や verblühen, einschlafen のような、アクティオンスアルトとしての完了相は、異質性によって十分に規定され、blühen や schlafen のような、アクティオンスアルトとしての不完了相は、分割性によって十分に規定されるということである。こうして異質性と分割性がアクティオンスアルトの両極を特徴づけるのであれば、この二つの性質は語彙的なものとして、つまり辞書の中で、個々の動詞に帰されるものと考えられる。反対に残りの性質、すなわち、非異質性と非分割性は、必ずしも語彙的な性質である必要はなく、これらは語彙的な方法、すなわち文法的な方法で表示されても構わないはずである。語彙的なアクティオンスアルトと文法的なアスペクトとの接点が想定されるとすれば、この非異



質性と非分割性こそ、その有力な候補であると考えられる。この場合、Aspectは表3のように組織されるであろう：

表3：Aspectとしての完了相と不完了相

	異質性	分割性
完了相		—
不完了相	—	

Aspectとしての完了相は出来事が非分割的であることを、不完了相は非異質的(均質)であることを示す表現である。ここで、前者については異質性、後者については分割性の別が問われない不完全指定となっている点が重要である。この点にこそ、対照的な完了相と不完了相が、個別のアクションスアルトを超えて機能する余地があるのであり、同一の動詞に両方の相が、時制などの文法範疇の如何に関わらず適用されれば、究極にはスラヴ語のようなAspectのペアになる。もとよりドイツ語は、2.1. 節で確認したとおり、そのような状態にはない。しかし、その状態に繋がる潜在的な可能性は排除されない。次節で確認していこう。

### 3. さまざまな文法現象とAspect

以下では、表3のようなAspectが、さまざまな語彙的、造語的、文法的な現象において、体系化・機能化を促進していることを確認する。

#### 3.1. 機能動詞構造とAspect

機能動詞構造とは、Polenz(1963)に遡る名称で、(10a), (11a)のように、出来事の実質的な概念が名詞句 *Nachricht* や前置詞句 *zur Aufführung* によって示される一方、動詞の *geben* (> *gaben*) や *bringen* (> *brachte*) は文字通りの意味(「与える」、「持って来る」)が希薄化した機能動詞として機能する表現のことである。(10b), (11b)の *benachrichtigen* (> *benachrichtigten*) や *aufführen* (> *führte ... auf*) のような、単独の動詞の表現と比べて、表される出来事という点ではほぼ等価である：

- (10)a. *Wir gaben ihnen Nachricht.*  
 b. *Wir benachrichtigten sie.*  
 私たちは彼らに知らせた。

(11)a. Das Theater *brachte* das Stück *zur Aufführung*.

b. Das Theater *führte* das Stück *auf*.

劇場はその作品を上演した。

このように単独の動詞表現と記述的意味が等価であるため、機能動詞構造は、単なる文体上のヴァリエーションと見なされることが少なくないが（例えば Polenz 1963 自身）、意味論の他の面や伝達機能の面では単独の動詞の表現に見られない性質が認められるケースもある。そのうち、特に重要と思われるものを3つ挙げよう。

ひとつは、ヴァレンツの条件が変わることにより、単独の動詞では必須だった補足語が、機能動詞構造では示されないことがある（Helbig & Buscha 1987: 103-104）。例えば (10b) の動詞 *benachrichtigen* は知らせの受け手を対格目的語 (*sie*) で示し、この目的語は (12b) のように省くことができないが、同じ受け手を与格目的語 (*ihnen*) で示す機能動詞構造 *gaben ... Nachricht* では、この受け手は、(12a) のように示されないこともある：

(12)a. Wir *gaben Nachricht*.

b. \*Wir *benachrichtigten*.

次いで、単独の動詞では作ることが難しい受動態が、機能動詞構造によって代用されることがある。例えば、*sehen* や *vergessen* のような認知の動詞は、たいてい (13) のように、*können* (> *kann*) や *dürfen* (> *darf*) など、可能性や必然性がいっしょに示されない限り、受動態を形成することが困難だが、(14) のような機能動詞構造を用いれば、そうした話法性なしでも知覚対象を主語とする表現が可能になる：

(13) a. Die chinesische Mauer *kann selbst aus dem Weltraum gesehen werden*.

万里の長城は宇宙からでも見ることができる。

b. Das *darf nie vergessen werden*.

これは決して忘れてはならない。

(14) a. Das Schiff *kam in Sicht*.

船が見えた。

b. Diese Tradition *ist mittlerweile in Vergessenheit geraten*.

この伝統はこの間に忘れられてしまった。

最後に、機能動詞構造は非生産的な接辞化や母音交替に代わってアスペクトを表現する造語的な手段である (Leiss 1992: 255-271). 通常の動詞による (15)-(16) であいまいなアスペクトが、(15')-(16') の機能動詞構造では明確にされている :

- (15) a. Dieses Verhalten **gefährdet** die Umwelt.  
この行動が環境を脅かす / 脅かしている.
- b. Die Umwelt **wird** (durch dieses Verhalten) **gefährdet**.  
環境が (この行為によって) 脅かされる / 脅かされている.
- (15') a. Dieses Verhalten **bringt** die Umwelt **in Gefahr**. [完了相 (使役的)]  
この行動が環境を脅かすことになる.
- b. Die Umwelt **kommt in Gefahr**. [完了相]  
環境が脅かされる.
- c. Die Umwelt **ist in Gefahr**. [不完了相]  
環境が脅かされている (=危機に瀕している).
- (16) a. Ich **bewegte** den Zug.  
私は列車を動かした / 動かしていた.
- b. Der Zug **bewegte sich**.  
列車が動いた / 動いていた.
- (16') a. Ich **setzte** den Zug **in Bewegung**. [完了相 (使役的)]  
私は列車を動かした.
- b. Der Zug **kam in Bewegung**. [完了相]  
列車は動き出した.
- c. Der Zug **war in Bewegung**. [不完了相]  
列車は動いていた.

(15) の動詞 gefährden (> gefährdet) は主語が状態変化の原因であることを意味するが、それ単体では、主語で示される「この行動」(dieses Verhalten) がその結果状態 (つまり「環境が危機に瀕する」状態) を今後引き起こすのか、それとも、現にそうした状態があって、その原因が「この行動」にあると言っているのか分からない。しかし、明確に完了相を示す (15'a) の機能動詞構造 bringt ... in Gefahr では、(15a) とは違って一義的に前者の読みが導かれる。さらに (15'b-c) は、(15b) の受動態に対応する表現であるが、ここでは機能動詞の選択 (kommt か ist か) で完了相と不完了相の別が表

現し分けられることにより、(15'a)と同様の未然性だけでなく、已然性のほうも明確に示すことが可能になっている。同様に(16)と(16')を比べても、(16)においては、a.のbewegteの意味が、列車(den Zug)を「動かした」なのか「動かしていた」なのか、b.のbewegte sichの意味が、列車(der Zug)が「動いた」なのか「動いていた」なのかあいまいであるが、(16')では、機能動詞構造が完了相や不完了相であることにより、このあいまいさは多かれ少なかれ解消される。つまり、能動態他動詞の(16a)に対応する(16'a)のsetzte ... in Bewegungは完了相を示して明らかに未然の読みを導くし、主語が動作主でないという意味で受動的な(16'b-c)では、kam ... in Bewegungとwar ... in Bewegungがそれぞれ完了相と不完了相を明確に示すので、未然性と已然性が一義的に解釈し分けられるようにまでなっている。

以上をまとめると、機能動詞構造はアスペクト効果を導く重要な手段であると言える。これは最後に指摘した(15)-(15'),(16)-(16')で直接的に明らかだが、その前に挙げたヴァレンツの変更や受動態の代替も、間接的にはアスペクトに通ずる。すなわち、単体の動詞benachrichtigenは、情報の受け手を表示する義務を伴う限り、行為の対象が常に限定されて非分割的な出来事となり、このままでは絶えず完了相であることを強いられるので、不完了相を示すための別の手段が必要になる。また、認知の動詞も話法性を伴わない限り受動態が作れないのだとすれば、この話法性ゆえに、表される出来事は均質化され、不完了相の解釈が強いらられるので、機能動詞構造が自由な視点化(脱話法化と完了相化)のために利用されるのである。さらに、認知動詞の例や最後の例では、有標の受動的な環境のほうが無標の能動的な環境に比べ、アスペクト的区別がより整備されている。有標性の原則とは逆の分布であるだけに、注意を要する。

### 3.2. 態とアスペクト

アスペクト的表現が受動的な環境と親和性が高いことは、分割性が、他動詞の主語ではなく、目的語(内項)の数量的限定に依存していることに鑑みれば納得の行くことだが、実際、文法的な態においても確かめることができる：

- |          |  |                    |
|----------|--|--------------------|
| (17)     | Er <b>reparierte</b> (ihr) den Wagen.            | 彼が(彼女に)車を直し(てあげ)た。 |
| (17') a. | Der Wagen <b>wurde</b> (ihr) <b>repariert</b> .  | 車は修理された。           |
|          | b. Der Wagen <b>ist repariert</b> .              | 車は修理してある。          |
|          | c. Sie <b>bekam</b> den Wagen <b>repariert</b> . | 彼女は車を修理してもらった。     |

ドイツ語において受動態と見なし得る表現は、(17') のように、いずれも本動詞の過去分詞 (*repariert*) に助動詞を組み合わせたものであるが、このうち伝統的に受動態と見られてきたものは、(17'a) の *werden* (> *wurde*) を助動詞とする受動態 (= *werden* 受動態) と (17'b) の *sein* (> *ist*) を助動詞とする受動態 (= *sein* 受動態) である一方、(17'c) の *bekommen* (> *bekam*) を助動詞とする受動態 (= *bekommen* 受動態) は、比較的最近になって認知されるようになったものである。そのため *bekommen* 受動態については、その文法化の程度をめぐる議論がなお活発で、むしろ *sein* 受動態以上に文法化しているとの指摘もなされるが (Hentschel & Weydt 1995)、その裏側には、*sein* 受動態への懐疑 (Hermanns 1987 を参照) が透けて見える。実際、過去分詞と *sein* の結合はしばしば、本動詞と助動詞の結合ではなく、本動詞から派生した形容詞としての過去分詞と繫辞の組み合わせと捉えられている (例えば Rapp 1997 や拙論 2009)。

ここで、こうした議論の詳細に立ち入ることはできないが、すでにこの程度俯瞰しただけでも、もっぱら *sein* 受動態と *bekommen* 受動態が、文法的な表現としての受動態のステータスを疑われる一方、*werden* 受動態が受動態であることはコンセンサスとして確立していることが分かる。この差の背後にはいったい何があるのか。これが、まさにアスペクトに帰着する問題なのである。

### 3.2.1. *sein* 受動態のアスペクト性

*werden* 受動態と *sein* 受動態の対立は、わけても「動作受動」対「状態受動」の対立と捉えられる。「動作受動」である *werden* 受動態は出来事の過程を示し、「状態受動」である *sein* 受動態は、その過程が完結した結果もたらされる状態を示す。そこで、能動態の (18a) において *machte ... auf* 「開けた」という過程の担い手である動作主 (*sie*) やこの過程に伴う様態の表現 (*langsam*) は、(18b) のように *werden* 受動態であれば、任意に表現可能 (*von ihr, langsam*) である一方、(18c) のような *sein* 受動態では容認されない：

- (18) a. *Sie machte (langsam) den Vorhang auf.*  
 彼女は (ゆっくりと) カーテンを開けた。
- b. *Der Vorhang wurde (von ihr) (langsam) aufgemacht.*  
 カーテンが (彼女によって) (ゆっくりと) 開けられた。
- c. *Der Vorhang war (\*von ihr) (\*langsam) aufgemacht.*  
 カーテンは (彼女によって) (ゆっくりと) 開けてある。

また (19) のように、一定の結果をもたらさない *betrachten* (> *betrachtet*) 「眺める」のような出来事を *sein* 受動態で表すこともできない：

- (19) a. Viele Leute ***betrachteten*** das Bild.  
大勢の人がその絵を眺めた。  
b. Das Bild ***wurde*** von vielen Leuten ***betrachtet***.  
その絵は大勢の人によって眺められた。  
c. \*Das Bild ***war betrachtet***.

さらに、過程は明確な対象なしでも進行し得る一方、結果としての状態の残存を認識するには一定の対象が必要である。このため、「動作受動」である *werden* 受動態は、動作主に代わって主語になるはずの対象（目的語）を欠く自動詞からも、(20b) のように非人称受動を形成し得る一方、「状態受動」である *sein* 受動態は、(20c) が示すとおり、非人称受動を形成しない：

- (20) a. Viele Leute ***tanzten*** im Saal.  
大勢の人がホールで踊っていた。  
b. Im Saal ***wurde getanzt***.  
ホールでは踊りが行われた。  
c. \*Im Saal ***war getanzt***.

ただし *sein* 受動態のこれらの性質は、次のような例によって若干相対化される：

- (21) a. Das Buch ***ist gelesen***. (Thieroff 1992: 25)  
その本は読み切られた。  
b. Das Würstchen ***ist gegessen***. (ibid.)  
ソーセージは食べてしまわれた。  
c. Jetzt ***ist ausdiskutiert!*** (Zifonun, Hoffmann & Strecker 1997: 1814)  
さあ議論はおしまいだ。

(21a-b) は一定の結果状態を含意しない *lesen* (> *gelesen*) 「読む」や *essen* (> *gegessen*) 「食べる」で作られた *sein* 受動態の例、(21c) は *ausdiskutieren* (> *ausdiskutiert*) 「議論

を尽くす」から形成された非人称の *sein* 受動態の例である。

*sein* 受動態のこうした独特の振る舞いは、アスペクトとの関連でこそよく理解される。*sein* 受動態が「動作受動」に対する「状態受動」である限り、この受動態には一定の結果状態を含んだ動詞しか現れない。これは異質な時間を統合した出来事なので、語彙的に完了相の動詞である。しかし、*sein* + 過去分詞という結合が表現形式のパターンとして定着するや、この相は、過去分詞で示される動詞の本来の性格ではなく、この結合全体の性質と見なされて、文法化されていく。つまり、語彙的には異質な時間の統合ではない *lesen* や *essen* のような動詞も、非分割的である限り、この結合に収まることが可能となり、(21a-b) の *sein* 受動態は、出来事の終端への到達を表現するものとして理解されるのである。

一方、非人称受動については、通常、目的語が不在である限り、数量的限定は行われないため、出来事は分割的となり、この性質が *sein* 受動態の求める非分割性と相容れないので、非人称の *sein* 受動態は不可能であると考えられる。しかし、*diskutieren* 「議論する」に対するアクツィオンスアルト動詞 *ausdiskutieren* (21c) は、目的語の明示如何に関わらず、すでに本来的に完了相（終了相）であり、非分割的であるため、基底の目的語を前提としなくても *sein* 受動態が成立して非人称受動となる。

こうして、*sein* 受動態はもはやアクツィオンスアルト的に結果相を示す「状態受動」から脱却していると考えられる。*sein* 受動態は完了の *werden* 受動態と対をなすかたちで、その結果状態を表すというよりは、同一の時制において *werden* 受動態とペアをなすことで、当該の時間における出来事の未然性に対する已然性を示すはたらきがある。ここには、アスペクトとしての完了相と不完了相の対立が作用していると考えられる：

- (22) a. Die Sitzung **wird** heute **beendet**. [出来事の未然性]  
           会議は今日終了になる。
- b. Die Sitzung **ist** hiermit **beendet**. [出来事の已然性]  
           会議はこれをもって終了します。

とはいえ、*sein* 受動態の適用範囲は依然として限定されている。すなわち、非分割的と解釈され得る出来事でのみ、*sein* 受動態は可能である。そのように潜在的に非分割的な出来事について、この性質を顕在化させずに、出来事を不完了相で提示するのが *sein* 受動態なのであり、すでに明確に分割的であるような出来事に冗長に適用さ

れることはない（先の (19c) 参照）。この点で、分割性の如何に関わらず動作主を主語から格下げする *werden* 受動態と異なり、一貫した項交替の表現とはなっていない。ここに、文法的な範疇として *sein* 受動態を認めるのが躊躇される原因がある。

### 3.2.2. bekommen 受動態のアスペクト性

同様に、*bekommen* 受動態も、アスペクトに敏感な表現である。(23b) において、能動態の (23a) でもともと対格だった目的語 *den Orden* を主語 *der Orden* に格上げする *werden* 受動態 *wird ... verliehen* に対し、(23c) の *bekommen* 受動態 *bekommt ... verliehen* は、(23a) でもともと与格だった目的語 *ihm* を主語 *er* に格上げする態と見なされる (Eroms 1978, Leirbukt 1997, Reis 1985, Wegener 1985 などを参照) :

- (23) a. Die Stiftung **verleiht** ihm den Orden.  
財団は彼に勲章を授与する。
- b. Der Orden **wird** ihm (von der Stiftung) **verliehen**.  
勲章は彼に (財団から) 授与される。
- c. Er **bekommt** (von der Stiftung) den Orden **verliehen**.  
彼は (財団から) 勲章を授与される。

しかし、ここに純粋な与格の格上げ機能が認められるのかどうかは、疑問視されてもいる。というのも、*bekommen* + 過去分詞の表現がたいいてい、与格と同時に対格の目的語も要求するような、広義に「授与」と捉えられる出来事に適用される一方、対格の目的語が存在しなくなるや、途端に容認性が低くなるからである。例えば (24a) の動詞 *helfen* (> *geholfen*) 「手伝う」は、その唯一の目的語を対格ではなく、与格で支配する動詞だが、この動詞から形成された *bekommen* 受動態は — Leirbukt (1997: 43, 144) によれば実例があるとはいえ — 少なからぬドイツ語話者にとってなお完全には容認し難い表現である。また、(24b) の *folgen* (> *gefolgt*) 「ついて行く」に至っては、Leirbukt (1997: 67) の調査でも *bekommen* + 過去分詞は不可能である :

- (24) a. <sup>(?)</sup>Sie **bekam** (von ihrem Mann) **geholfen**.  
彼女は (夫に) 手伝ってもらった。
- b. \*Sie **bekam** von einem Mann **gefolgt**.  
彼女は男について来られた。



このように、*bekommen* 受動態による与格の格上げが限定的にしか可能でない背後には、ふたたびアスペクトの関与が認められる。つまり、*bekommen* 受動態も *sein* 受動態同様、非分割的な出来事にのみ適用される。表される出来事が広義の授与の場合、対格目的語である授与の対象または与格目的語である受け手の数量的限定性から出来事の非分割性が導き出し得るので、問題なくこの受動態が可能になる一方、二項動詞の *helfen* や *folgen* では、その与格目的語が限定の効果を持たず、出来事は分割的である。このせいで、これらの動詞による *bekommen* 受動態は低い容認度に留まるのである。<sup>3)</sup>

### 3.3. 時制とアスペクト

最後に時制に目を向けよう。ドイツ語は (25) のような 6 つの時制を持つ言語とされることが多い一方 (Admoni 1970: 181-192, Erben 1964: 45-59, Grebe 1973: 79-87, Heidolph, Flämig & Motsch (eds.) 1981:507-520, Helbig & Buscha 1987: 146-158, Hentschel & Weydt 1990: 86-106 など)、異論も少なくない：

- (25) a. Karl *liest* (gerade) das Buch. [現在時制]  
 カールはその本を読む / (いまちょうど) その本を読んでいる。
- b. Karl *hat* das Buch (schon) *gelesen*. [(現在) 完了時制]  
 カールはその本を (すでに) 読んだ。
- c. Karl *las* (gerade) das Buch. [過去時制]  
 カールはその本を読んだ / (そのときちょうど) その本を読んでいた。
- d. Karl *hatte* das Buch (schon) *gelesen*. [過去完了時制]  
 カールはその本を読んだ / (すでに) 読んでいた。
- e. Karl *wird* (morgen) das Buch *lesen*. [未来時制 I]  
 カールは (明日) その本を読む。
- f. Karl *wird* das Buch (morgen) *gelesen haben*. [未来時制 II]  
 カールはその本を (明日には) 読んでいる。

<sup>3)</sup> それでも *helfen* による *bekommen* 受動態がそれなりの容認度を示すのは、この動詞に非分割的と捉えやすい素地があるためと考えられる。例えば、*jmdm. aus dem Wagen helfen* 「人を手伝って車から降ろす」のように、目的語の状態変化が容易に組み込まれるし、*sein* 受動態も可能である (例: *Ihm war geholfen*. 「彼は助けられた」)。

これら、時制とされる6つの表現のうち、ここではアスペクトとの関連で注目すべき完了時制と未来時制 I を取り上げる。

### 3.3.1. 完了時制

完了時制には助動詞の選択がある。一部の例外(繫辞の *sein* や *bleiben*「～に留まる」)を除き、完了相の自動詞は (26a) のように、助動詞として *sein* (> *ist*) を選択する一方、助動詞 *haben* は、(26b-d) のように完了相の他動詞や不完了相の自動詞・他動詞に適用される。これはしばしばアスペクトの関与として論じられている (Admoni 1970: 172-173, Helbig & Buscha 1987: 75-76, Heidolph, Flämig & Motsch (eds.) 1981: 561) :

- (26) a. Das Baby *ist* gerade *eingeschlafen*. [完了相・自動詞]  
赤ん坊はちょうどいま眠りについた。
- b. Die Mutter *hat* das Kind *eingeschläfert*. [完了相・他動詞]  
母親は子供を寝かしつけた。
- c. Das Baby *hat* zwei Stunden *geschlafen*. [不完了相・自動詞]  
赤ん坊は2時間眠った。
- d. Die Mutter *hat* Wiegenlieder *gesungen*. [不完了相・他動詞]  
母親は子守唄を歌った。

もともと、自動詞における *sein* の選択は、完了相を不完了相から区別して示すものではなく、むしろ、その区別を明らかにしないほうに作用している。すでに 2.2. 節 (9) で過去分詞による名詞の修飾に触れたが、この修飾は自動詞においては、完了相でのみ可能であり、(27a) のように、実際、その出来事が完了相、つまり非分割的である必要があった。また、外見上は自動詞の完了と同じく *sein* + 過去分詞で示される *sein* 受動態も、すでに述べたとおり、非分割的な出来事に適用され、*werden* 受動態とは異なる見方で対立する (既出の (22) を参照) :

- (27) a. der ins Haus *gelaufene* Mann  
建物の中に駆け込んだ男
- b. \*der (zwei Stunden lang) *gelaufene* Mann  
(2時間) 走った男

しかし、完了時制における *sein* の選択は、(28) が示すとおり、出来事の分割性には左右されないし、*haben* との対立も、同一の出来事に対する異なる見方を示すものではなく、出来事の類的相違 ((29a) は移動, (29b) は移動でない) の表れである：

- (28) a. *Er ist ins Haus gelaufen.*  
彼は建物の中に駆け込んだ。  
b. *Er ist/\*hat (zwei Stunden lang) gelaufen.*  
彼は (2 時間) 走った。
- (29) a. *Sie ist auf die Bühne getanzt.*  
彼女は踊りながら舞台上上がった。  
b. *Sie hat (heftig) getanzt.*  
彼女は (激しく) 踊った。

そもそも *haben* が他動詞において、完了相・不完了相の別なく用いられることも合わせて考慮すると、完了の助動詞の選択は、全体としてAspectの相違を示すのではなく、それを不問に付すはたらかきがあると言える。まさにこのような基盤に立ってこそ、この表現は今日、過去時制と並んで (あるいは、これを凌ぐ格好で)、過去の出来事を指示する時制となり得ているのである。<sup>4</sup>

### 3.3.2. 未来時制 I

未来時制 I は、(25e) のように助動詞 *werden* (> *wird*) と本動詞の不定詞 (*lesen*) の結合で表されるとされる。もっともこの結合自体は、しばしば (30) のように話法的な意味合い (決意、推量など) を伴い、必ずしも発話時以降の時間に関連づけて解釈する必要はない。また、時間としての未来の指示も、必ずしもこの結合による必要はなく、(31) のように現在時制によって問題なくなし得る。こうしたことから、*werden* + 不定詞を時制とする見方に対して疑いが生まれ (例えば Saltveit 1960, Vater 1975)、これが時制の表現なのか、話法性の表現なのか、盛んに議論が行われてきた：

---

<sup>4</sup> このため過去時制については、その特質を過去という時間指示以外のところに見出そうとする試みが少なくない。例えば、Thieroff (1992: 274-299) は現在時制と過去時制、完了時制と過去完了時制の対立を「距離 (Distanz)」の対立としているし、Fabricius-Hansen (1999) は法の範疇化と捉え、ちょうど接続法が形態・機能的に 2 種類存在するのと並行的に、直説法でも、直説法 I としての現在時制に直説法 II としての過去時制が対置されるとしている。

(30) a. Ich **werde** das Buch **lesen**.

私はその本を読もう。

b. Karl **wird** (gerade) das Buch **lesen**.

カールは (いまちょうど) その本を読んでいるだろう。

(31) Karl **liest** morgen das Buch.

カールは明日その本を読む。

しかし最近では、未来時制の存在はアスペクトに依存しているという見解が示され、研究の動向は新たな局面を迎えている。すなわち、Leiss (1992) によれば、未来時制 I が存在するのは不完了相だけで、完了相にはこの時制が存在しないという：

- (32) 1. Futur I und futurisches Präsens sind bei durativen und aspektuell neutralen Verben synonym. Futur I wird bevorzugt gesetzt a) zur Monosemierung des Zeitbezugs, b) in normativen Kontexten auch dann, wenn eine solche Monosemierung nicht notwendig ist. 2. Bei terminativen Verben stellt nur das futurische Präsens nichtmodalisierten zukünftigen Zeitbezug her. (Leiss 1992: 205)
1. 未来時制 I と未来的な現在時制は、継続相やアスペクト的に中立の動詞では同義である。未来時制 I は a) 時間指示を一義的にする目的で、または b) 規範的な文脈では、そのような一義化が必要でなくても、優先的に用いられる。2. 終端的な動詞では、未来的な現在時制だけが、話法化されない未来の時間指示を実現する。(拙訳)

ここに引用した中の第 1 の点について、「継続相やアスペクト的に中立の動詞」とは、blühen「咲いている」や schlafen「眠っている」のような動詞、または、lesen「読む」や essen「食べる」のような動詞を指し、これらは、2.2. 節で確認したとおり、異質でない(均質な)時間の集積であった。ただし、アスペクト的に中立な lesen や essen は、分割性について必ずしも分割的であるとは限らず、非分割的なこともあり得る。そして実際、非分割的であれば、まさにその出来事が分割できないという理由から、その中に基準時の「いま」を置いて内観することはできない。すると、現在時制の基準時である「いま」は出来事の外に位置することとなり、「当該の出来事は今後起こる」という未来指示の関係が示されることになる。とはいえ、非分割的という性質は、これらの動詞に安定的に認められる性質ではないため、常に分割的である継続相の動詞

だけでなく、アスペクト的に中立な動詞でも、現在時制は現在継続中の出来事を指示する蓋然性が高い。そこで、不確実な現在時制による未来指示に代わり、これを確実に行うのが未来時制 I なのである。

他方、第 2 の点にある「終端的な動詞」とは、起動相や終了相、使役相などのアクティオンズアルトとしての完了相の動詞である。これらの動詞が意味する出来事は、異質な時間の統合であり、必ず非分割的である。非分割的な出来事を表す以上、これらの動詞では、いま述べた経緯から、現在時制によって未来指示が行われるので、未来時制は必要なく、werden + 不定詞は、話法的な解釈しか受けないということになる。

このように、Leiss (1992) の一般化は、出来事の異質性と分割性で解釈して、極めて明快で、筋の通ったものとなっており、仮説としてたいへん興味深い。ただし、経験的な検証はなお十分でなく、これからの課題として残されている。

また、この関連ではさらに、werden の多機能性も再考しなければならないだろう。すでに見たとおり、受動態の助動詞としての werden と sein の対立は、「動作受動」と「状態受動」の対立を超え、より文法的な視点化に繋がりがつつある。(22) で例示したように、現在時制で未然性を表す werden は完了相、已然性を表す sein は不完了相の表現に近づいている。とすれば、時制の助動詞とされる werden も、現在時制に対する未来時制を示すのではなく、能動・受動を問わず一貫して文法的な完了相を示し、これが現在時制と組み合わせさせて未来指示を行っているとも考えられる。

もとより、現時点でこれは単なる推測に過ぎない。しかし、少なくともその可能性のある限り、werden + 不定詞の表現は、アスペクトから時制に発展した sein / haben + 過去分詞とは対照的な脱時制化・アスペクト化の事例として注目すべき現象と言える。受動的な環境で進んだアスペクト表現の整備は、能動的な環境でも進行しているわけで、有標性の原則に沿う方向で均衡が図られつつあると考えられる。また、werden をそのようなアスペクト表現の標識と捉えてこそ、その活用形の würde が、今日広範に — 例えば過去時制における未来の表現 (Thieroff 1992: 140-159) や接続法 II の表現として — 時制や法を横断するかたちで分布するわけも理解されるのではないだろうか。

#### 4. むすび

本稿では、一般にアスペクト言語と見なされていないドイツ語からアスペクトを掘り起こすことを試みた。その際、方法論として、出来事の内的時間構成を異質性と分割性の二つの次元で特徴づけ、それらの完全指定・不完全指定によって語彙的なアクティオンズアルトと文法的なアスペクトを区別するとともに、両者の接点をも保障

する分析法を提示した。これにより、機能動詞構造のような語彙的・造語的な領域から、態や時制などの文法的な範疇化に至るまで、ドイツ語においてもアスペクトが基盤的な役割を果たしていることが確認できたと思う。この結果から、ドイツ語にアスペクトがないとすれば、それはアスペクトが実際存在しないからではなく、これを見出すような姿勢が取られていなかったからだ、ということが分かる。問われるべきはドイツ語ではなく、研究者のアスペクト (= 見方) だったのである。

### 参考文献

- Admoni, Wladimir 1970. *Der deutsche Sprachbau*. 3., durchges. u. erw. Aufl. München: Beck.
- Bußmann, Hadumod 1983. *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart: Kröner.
- Erben, Johannes 1964. *Abriß der deutschen Grammatik*. 7., neubearb. Aufl. Berlin: Akademie-Verlag.
- Eroms, Hans-Werner 1978. Zur Konversion der Dativphrasen. *Sprachwissenschaft*, 3: 357-405.
- Fabricius-Hansen, Cathrine 1999. “Moody time”: Indikativ und Konjunktiv im deutschen Tempussystem. *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik*, 113: 119-146.
- Fujinawa, Yasuhiro 2009. (In-)Finitheit, unterspezifizierte Kasus und Argumentstruktur: Über Partizipien II im Perfekt und Passiv im Deutschen. *Perspektiven Drei: Akten der 3. Tagung Deutsche Sprachwissenschaft in Italien (Rom, 14.-16.2.2008)*, ed. by Di Meola, Claudio, Livio Gaeta, Antonie Hornung & Lorenza Rega, Frankfurt a.M. et.al.: Lang, 103-115.
- Grebe, Paul 1973. *Duden. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. 3., neubearb. u. erw. Aufl. Mannheim, Wien & Zürich: Dudenverlag.
- Heidolph, Karl Erich, Walter Flämig & Wolfgang Motsch (eds.) 1981. *Grundzüge einer deutschen Grammatik*. Berlin: Akademie-Verlag.
- Helbig, Gerhard & Joachim Buscha 1987. *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. 10., unveränd. Aufl. Leipzig: Enzyklopädie.
- Hentschel, Elke & Harald Weydt 1990. Das leidige bekommen-Passiv. *Deutsch als Fremdsprache. An den Quellen eines Faches. Festschrift für Gerhard Helbig zum 65. Geburtstag*, ed. by Popp, Heidrun, München: Iudicium, 165-183.
- & --- 1995. *Handbuch der deutschen Grammatik*. Berlin & New York: de Gruyter.
- Hermanns, Fritz 1987. Ist das Zustandspassiv ein Passiv? Versuch, einer terminologischen

- Ungereimtheit auf die Spur zu kommen. *Das Passiv im Deutschen. Akten des Kolloquiums über das Passiv im Deutschen, Nizza 1986*, ed. by Centre de Recherche en Linguistique Germanique (Nice), Tübingen: Niemeyer, 181-213.
- Leirbukt, Oddleif 1997. Untersuchungen zum *bekommen*-Passiv im heutigen Deutsch. Tübingen: Niemeyer.
- Leiss, Elisabeth 1992. Die Verbalkategorien des Deutschen. Berlin & New York: de Gruyter.
- Polenz, Peter von 1963. *Funktionsverben im heutigen Deutsch. Sprache in der rationalisierten Welt*. Düsseldorf: Schwann.
- Rapp, Irene 1997. *Partizipien und semantische Struktur. Zu passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg.
- Reis, Marga 1985. Mona Lisa kriegt zu viel: Vom sogenannten “Rezipientenpassiv” im Deutschen. *Linguistische Beirche*, 96: 140-155.
- Saltveit, Laurits 1960. Besitzt die deutsche Sprache ein Futur? *Der Deutschunterricht*, 12-5: 46-65.
- Thieroff, Rolf 1992. *Das finite Verb im Deutschen. Tempus – Modus – Distanz*. Tübingen: Narr.
- Vater, Heinz 1975. *Werden als Modalverb. Aspekte der Modalität*, ed. by Calbert, Joseph P. & Heinz Vater, Tübingen: Narr, 71-148.
- Wegener, Heide 1985. “Er bekommt widersprochen”: Argumente für die Existenz eines Dativpassivs im Deutschen. *Linguistische Beirche*, 96: 127-139.
- Zifonun, Gisela, Ludger Hoffmann & Bruno Strecker 1997. *Grammatik der deutschen Sprache*. Berlin & New York: de Gruyter.

## Aspekt im Deutschen: Eine methodische Überlegung zur Dynamik sprachlicher Perspektivierungen

Yasuhiro FUJINAWA

Anders als die slawischen Sprachen wird das Deutsche im Allgemeinen nicht als Aspekt-Sprache angesehen. Diese Ansicht verdankt sich m.E. nicht so sehr der Inexistenz verbmorphologisch gepflegter grammatischer Aspektpaare in dieser Sprache selbst, sondern vielmehr (und gerade) dem Umstand, dass Linguisten normalerweise in einer im Grunde genommen semasiologischen und taxonomischen Sichtweise („Aspekt“) an dieses Problem herangehen.

Um eine solche Sichtweise zu relativieren, wird im vorliegenden Beitrag zuerst auf Seiten des Bezeichneten eine dynamische Definition von Perfektivität und Imperfektivität gegeben. Nach dieser Definition werden die beiden Kategorien mit Hilfe zweier, zwar miteinander zusammenhängender, doch grundsätzlich voneinander unabhängigen Kriterien, d.h. der intern zeitlichen Heterogenität und der Dividierbarkeit von Ereignissen polarisiert. Die dadurch entstehende duale Asymmetrie zwischen der Perfektivität und der Imperfektivität erlaubt es, den Aspekt als grammatische Erscheinung von der Aktionsart als lexikalischer auseinanderzuhalten, ohne jedoch die diesbezüglichen Schnittstellenbedingungen aus dem Auge verlieren zu müssen.

Mit einem solchen Instrumentarium soll dann illustriert werden, dass der so herausgefundene Aspekt im Deutschen auch eine fundamentale Rolle bei der Systematisierung und Funktionalisierung von verschiedenen lexikalisch-wortbildenden sowie grammatisch-syntaktischen Ausdrücken wie z.B. Funktionsverbgefügen, Genera Verbi und nicht zuletzt Tempora spielt. Dabei wird sich herausstellen, dass sich die relativ gut ausgebaute Aspektualität in passivischen Bereichen (z.B. *werden-* vs. *sein-*Passiv) zum einen auf die Deaspektualisierung/Temporalisierung von Perfekt auswirkt, zum anderen aber auch auf die Aspektualisierung/Detemporalisierung von Futur I. Damit wird das Hilfsverb *werden* zum konsistenten, d.h. in Verbindung mit Partizip II und Infinitiv nicht nur im Passiv, sondern auch im Aktiv geltenden Ausdruck der Perfektivität, wodurch die sonst verkehrt bleibenden Markiertheitsverhältnisse gerade ausgeglichen werden.